

コロナ禍を経た家族の関係性の変化

#01

コロナ禍を経た人々の意識変化

コロナ禍が人々の生活に与えた影響

2020年に日本で新型コロナウイルス感染症の流行が明らかになり、東京都に1回目の緊急事態宣言が適用されてから約2年が経過した。東京都ではこの間に4回の緊急事態宣言、3回のまん延防止等重点措置が適用され、かなりの長期間にわたって、外出や飲食店での会食の自粛が要請された。また、企業の感染防止のため、在宅勤務(テレワーク)による出勤者数削減が呼びかけられた。東京都の調査によれば、2022年2月の都内企業(従業員30人以上)のテレワーク実施率は62.7%、テレワークを実施した社員の割合は、47.2%、テレワークの実施回数は、週3日以上の実施が51.2%である[図表1]。さらに、学校や幼稚園、保育園の休

校、休園が頻繁になるなど、家族が自宅内で生活する時間はコロナ禍以前に比べて格段に増加した。

こうした状況下で、首都圏の生活者、とりわけ家庭における夫婦それぞれの生活はどのように変化したのだろうか。筆者は(株)カルチャースタディーズ研究所(代表・三浦展)が、三菱総合研究所で毎年実施している3万人調査「生活者市場予測システム(mif)」への追加調査として2022年1月に行った「コロナ後の意識と行動の変化」調査(1都3県18~54歳男女2,000人)に参加した。この調査で、「コロナ感染症が広まって以来、現段階まで、あなたの気持ちや行動に変化はあったでしょうか。以下の中で、あてはまるものをいくつでもチェックしてください。(複数回答)」という質問(選択肢は110個)に対する回答を男女×仕事の有無×子どもの有無で分けて集計し、分析を行った。

まず、全体で見ると、以下のような項目が上位に挙がっている。

- 1位 無駄な物を買わないようにしたいという気持ちが増した(20.7%)
- 2位 のんびりマイペースで生きることが大事だという気持ちが増した(20.5%)
- 3位 スーパーでの買い物や買いだめが増えた(18.6%)
- 4位 お金をあまり使わない暮らしをしたいという気持ちが増した(18.6%)
- 5位 自分の好きなことをたくさんして

人生を楽しむことが大事だという気持ちが増した(18.4%)

6位 毎日通勤するのは嫌だという気持ちが増した(18.1%)

7位 テレビゲームをしたり映画・アニメを見たりマンガを読む時間が増えた(17.3%)

8位 人と会うことは楽しいことだという気持ちが増した(15.3%)

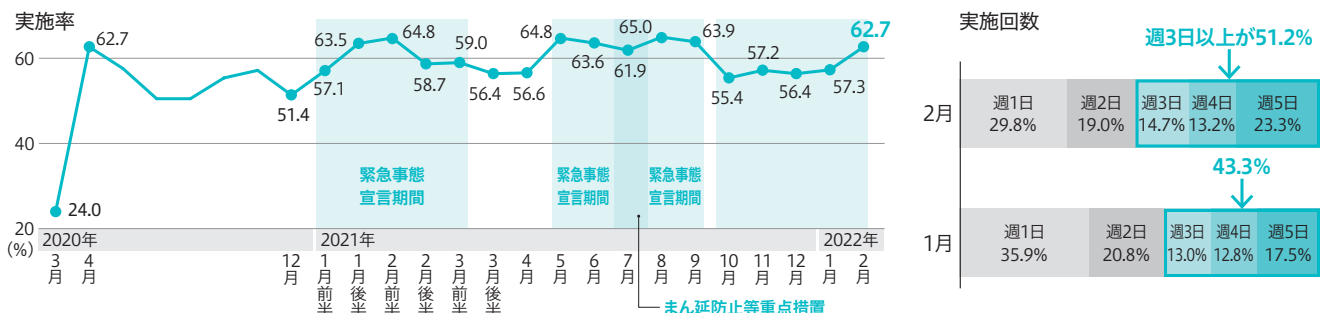
9位 仕事と生活のバランスをうまく取りたいという気持ちが増した(14.9%)

10位 ウォーキングをすることが増えた(14.8%)

全体的には儉約志向が高まるとともに、のんびりマイペースで人生を楽しみたいという意識が高まっている人が多い(最も多い項目で20.7%なので、これを多いとみるか2割しかいないとみるかは、判断の分かれるところではあるが)。全体として外出自粛の影響からか、生活の活動性が低下し、インドア志向に傾いている。一方で外出や人との交際が減ったことで、人と会うことの楽しさを再認識するとともに、家族や夫婦の関係が改めて見直されていることがわかる。

こうした全体傾向を、家庭内の夫婦それぞれの視点で見ると、外出自粛やリモートワーク、子どもの休校等が夫婦の関係性に及ぼす影響の差がわかり、興味深い結果となった。

[図表1] 都内企業(従業員30人以上)のテレワーク実施状況



出所: 東京都産業労働局「テレワーク実施率調査」2022年3月報道資料 <https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2022/03/04/08.html>

Paradigm Shift

#02

子どものいる女性の意識変化

家事育児負担増で夫婦関係を見直すワーキングマザー

ではコロナ禍は家族にどのような影響を与えたのだろうか。子どものいる母親の立場から有職・専業に分けて見てみたい。

まず、ワーキングマザー(仕事をしている子あり女性133名)である。「職場に行かず自宅などでリモートワークをすることが週1、2回あるようになった」人は3.8%、「勤務日のだいたい半分以上あるようになった」人は6.0%。ワーキングマザーのうち正社員は30.1%、パート・アルバイトが54.1%であることから、元々フルタイムの就業ではない人が多いとみられ、自分自身のリモートワーク化の影響はあまり受けていないようだ。

そんなワーキングマザーの回答を見ると、「無駄な物を買わないようにしたいという気持ちが増した」「お金をあまり使わない暮らしをしたいという気持ちが増した」という項目で全体より数字がかなり高く、家計を引き締めようという意識が強くなっている【図表2】。パート・アルバイトの場合、時給でシフトが組まれることが多いことから、コロナ禍の影響で収入が減り、家計が厳しいと感じる人が多いことがみとれる。また、「生活を合理的・効率的にしたいという気持ちが増した」

「子どもの世話が大変だ」という気持ちが増した」も全体より高く、夫の在宅勤務や子どもの休校等の影響で、家事負担が増し、時間的余裕がなくなったことがわかる。さらに「家族関係・夫婦関係が大事だ」という気持ちが増した」「家族間・夫婦間のいざこざが増した」といった項目が全体に比べて高くなっており、家計の厳しさや時間の余裕のなさの中で、家族のコミュニケーションを見直す機会が増えたことがうかがわれる。

一人の時間と空間がなくなったと感じる専業マザー

一方、専業マザー(専業主婦子あり既婚女性151名)の場合はどうだろうか。ワーキングマザーとの比較で見ると、「スーパーでの買い物や買いだめが増えた」「自分の好きなことをたくさんして人生を楽しむことが大事だ」という気持ちが増した」「ひとりになりたいと思う気持ちが増した」

「今より1部屋以上多い家に住みたい気持ちが増した」「子どもの世が大変だ」という気持ちが増した」といった項目の値が高い。家事育児の負担が増したという実感が強いワーキングマザーに比べ、専業マザーは、ほぼ自分一人で専有していた自宅に夫や子どもが在宅するようになり、自分の時間と空間がなくなったと感じていることがうかがわれる【図表2】。

SNSには、夫が家事育児を全くしない、しかも“お手伝い”程度でしかない、にもかかわらず、自分が家事をやっていることをアピールしてくる、在宅ワークをする夫の都合優先で子どもを静かにさせたり、ワークスペースを確保しなければならぬことへの妻の不満や疑問が溢れている。逆に快く当たり前家事をする夫の評価は大きく上がる。日本の夫の家事育児への貢献度の低さは以前から問題にはなっていたが、それが、夫の在宅によりますます顕在化したものと思われる。

【図表2】 コロナ後の意識と行動の変化

	ワーキングマザー		専業マザー	
	全体	ワーキングマザー	全体	専業マザー
N	2,000	133	2,000	151
無駄な物を買わないようにしたいという気持ちが増した	20.7%	33.1%	18.6%	33.8%
お金をあまり使わない暮らしをしたいという気持ちが増した	18.7%	28.6%	18.4%	27.2%
人と会うことは楽しいことだという気持ちが増した	15.3%	27.8%	14.1%	27.2%
家族関係・夫婦関係が大事だという気持ちが増した	14.1%	27.1%	15.3%	25.8%
断捨離をすることが増えた	13.2%	27.1%	13.4%	22.5%
地震・台風・事故などへの災害・避難への対応を日頃からしっかりしておきたいという気持ちが増した	10.3%	18.8%	13.2%	21.9%
生活を合理的・効率的にしたいという気持ちが増した	11.0%	18.0%	11.3%	21.2%
子どもの世が大変だという気持ちが増した	4.2%	12.0%	8.1%	19.9%
家族間・夫婦間のいざこざが増した	3.9%	9.8%	4.2%	19.9%
保育園・学童以外で子どもをあずけられる場所や人が家の近所に欲しいと思うようになった	1.5%	5.2%	5.0%	11.3%

「コロナ感染症が広まって以来、現段階までで、あなたの気持ちや行動に変化はあったでしょうか」に対する回答出所：ともに「コロナ後の意識と行動の変化」(mif追加調査)

#03

夫の意識と 夫婦のギャップ、 今後に向けて

ワーキングファザーの意識

一方のワーキングファザー(仕事をしている子あり男性288名)についてはどうだろうか。

「職場に行かず自宅などでリモートワークをすることが週1、2回あるようになった」人は12.2%、「勤務日のだいたい半分

【図表3】 コロナ後の意識と行動の変化
ワーキングファザー

	全体	ワーキングファザー
N	2,000	288
毎日通勤するのは嫌だという気持ちが増した	18.1%	23.3%
家族関係・夫婦関係が大事だという気持ちが増した	14.1%	18.4%
職場でのコミュニケーションがとりづらくなった	8.4%	17.0%
仕事用スーツ・シャツ・ブラウス・靴の購入が減った	7.9%	13.5%
職場での人間関係が希薄になった	7.5%	12.2%
職場に行かず自宅などでリモートワークをすることが週1、2回あるようになった	5.1%	12.2%
職場に行かず自宅などでリモートワークをすることが「勤務日のだいたい半分以上あるようになった」	7.1%	10.8%
子どもの世話が大変だという気持ちが増した	4.2%	9.7%
仕事で相手の気持ちや本音を察しづらくなった	4.1%	7.3%
仕事専用の部屋のある家に住みたい気持ちが増した	3.8%	7.3%

「コロナ感染症が広まって以来、現段階までで、あなたの気持ちや行動に変化はあったでしょうか」に対する回答
出所:「コロナ後の意識と行動の変化」(mif追加調査)

以上あるようになった」人は10.8%と、ワーキングマザーより多い。これはワーキングファザーの92.4%が正社員もしくは公務員等であることが影響していると思われる。

ワーキングファザーの回答で全体より高いのは、「毎日通勤するのは嫌だという気持ちが増した」「家族関係・夫婦関係が大事だという気持ちが増した」「職場でのコミュニケーションがとりづらくなった」「仕事用スーツ・シャツ・ブラウス・靴の購入が減った」「職場での人間関係が希薄になった」といった項目で、通勤の頻度が減ったことによる自分自身の生活変化が中心であり、家事や育児よりは自分の仕事や職場の同僚との関係に意識が向いているのがうかがえる【図表3】。もちろん毎日通勤するのは嫌だという気持ちは、自宅での生活を快適に整えてくれる妻の存在があるからであり、そのことを意識することからその「家族の関係が大事だ」ということだろうが、具体的に家事育児に積極的に意識を向ける気配は見られない。

夫婦のギャップの顕在化と今後への示唆

以上の調査結果を見ると、働いていないにもかかわらず、家事育児や家計といったホームマネジメントを中心に生活を考えざるを得ない女性と、仕事がメインで家庭生活についての優先度は低く、妻がケアしてくれるおかげでほぼ自分中心で済んでいる男性の意識のギャップが、コロナ禍で顕在化していることがわかる。

コロナ禍以前から男女の家事時間の差は女性の社会での活躍推進を阻む一つの要因と考えられており、「ワンオペ育児」や「名もなき家事」といった言葉がネットで広がっていた。こうした問題の原因は主に長時間労働と家事育児の合理化不



東洋経済オンライン (<https://toyokeizai.net/category/harayuki-family>) での連載をまとめた『ほしいのは「つかけない家族」—ワンオペ家事&育児に絶望した私が見つけた家族のシアワセ』(ハラユキ/講談社/2020)

足といわれ、それらを解決することで問題も解決すると思われてきた。ワークライフバランスやイクメン(男性の育児休暇)が推奨され、家事時間を短縮する「時短」商品やノウハウが喧伝されてきたのはそのためである。しかし、コロナ禍により、夫婦の「意識」と「行動・習慣」のギャップ、そして「コミュニケーション」の問題が顕在化していることは調査からも明らかである。

コミックエッセイストのハラユキは著書『ほしいのは「つかけない家族」—ワンオペ家事&育児に絶望した私が見つけた家族のシアワセ』(講談社)で、海外を含む多様な家族の仕事と家事育児の仕方についてのケーススタディを紹介し、「つかけない家族」の「家事育児分担」と「家庭内コミュニケーション」の共通点を挙げている。それは、互いのことを対等なパートナーとして話し合いをし、性差ではなく個人差での分担を模索し、こだわりのあるもの以外は積極的に合理化することでオーバーワークを防ぐというものである。今回の調査結果に見られる意識のギャップの顕在化は、今後の「つかけない家族」実現に向けての第一歩なのかもしれない。